

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：34509
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2010 ～ 2011
 課題番号：22730492
 研究課題名（和文） 第三者介入による対人コミュニケーション支援
 に関する社会心理学的研究
 研究課題名（英文） Is it possible for third party
 to support interpersonal communication ?
 研究代表者
 木村 昌紀（KIMURA MASANORI）
 神戸学院大学・人文学部・講師
 研究者番号：30467500

研究成果の概要（和文）：

本研究は、第三者介入による対人コミュニケーションの支援方法を明らかにするため、第三者のコミュニケーションに関する認識、および第三者介入の影響を検討した。研究 1 から、第三者はコミュニケーションを観察して、その良好性の判断に基づき、会話者間の親密性を推測していた。研究 2 から、関係性の事前情報は第三者の認知に影響していた。研究 3 から、第三者介入は会話者のリラックス感情を低下させており、コミュニケーションを阻害する危険性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

This study examined third party's perception of interpersonal communication and the effects of intervention by third party on interpersonal communication, in order to propose how to support interpersonal communication as third party. In study 1, third party inferred actor's intimacy based on observation of interpersonal communication, just as people could infer other's personality from behavioral information. Study 2 showed that prior information about actor's relationship influenced third party's judgment. Finally, from study 3, third party's intervention decreased actor's relaxation and it suggested a possibility that third party prevent interpersonal communication.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：対人コミュニケーション、第三者介入、行為者・観察者、対人感受性、社会的スキル、会話実験、コミュニケーション能力、当事者支援

1. 研究開始当初の背景

従来の研究では、情報交換の効率化や親密な関係の構築・維持の点から対人コミュニケーションの当事者が注目されていた(e.g., 大坊, 1998)。その際、特定の人物が円滑にコミュニケーションできるかどうかを、性格特性のような固定的なものではなく、トレーニングによって向上が可能な能力として扱う考え方が導入されていた(e.g., 相川, 2000)。自分の考えをうまく表現することができない、他者の考えを適切に理解することができない、親密な関係が築けずに孤立してしまう、といった問題に対して当事者のコミュニケーション能力を向上させることは重要である。実際に、学校や職場の教育場面でもトレーニング・プログラムの開発・実践が近年盛んに行われている。

しかし、対人コミュニケーションの問題解決法を、トレーニングによる当事者の能力向上だけに限定してしまうことは危険である。なぜなら、トレーニングは、短期的なものよりも長期的なものの方が効果的であり、現時点の問題をすぐに解決するような即効性がないためや、本人の価値観やコミュニケーション能力の多様性に起因してトレーニングの効果には個人差があるためである。コミュニケーションに極度な苦手意識がある場合や実際に不得手な場合は、当事者による問題解決が困難なことに加え、トレーニング推進がプレッシャーとなり、過度のストレスを課す恐れがある。

2. 研究の目的

当事者が対人コミュニケーションに対して極度な苦手意識をもつ場合や実際に不得手な場合に、トレーニングによって当事者の意識や行動を変容させる方略と同時に、外部から第三者が効率的に介入を行う方略を併用することが望ましい。これは2つの方略を併用することで、緊急性が高い問題の対処が可能となり、価値観や能力の多様性もカバーできるためである。近年の研究からも、第三者の評価を意識することで、対人コミュニケーションの当事者が採用する問題解決の方略が異なること(e.g., 福島・大淵・小嶋, 2006)や、コミュニケーションが苦手な人は第三者を利用して問題解決をはかること(e.g., Souma, Ura, Isobe, Hasegawa, & Morita, 2008)が報告されている。ただし、それらの研究では第三者介入によって対人コミュニケーションが支援できる可能性が示唆されるものの、どのような第三者介入が

対人コミュニケーションの効果的支援につながるのかや、第三者介入がどのような弊害をもつのかを検討できていない。そこで、本研究では観察実験と会話実験を体系的に実施して、第三者介入が対人コミュニケーションに及ぼす影響を解明することで「第三者介入による対人コミュニケーション支援の効率的方略」の提案を目指す。

- (1) 第三者が当事者の対人コミュニケーションを観察して、コミュニケーションの良好性、会話者間の親密性、会話者間の関係カテゴリーをどのように判断するのかについて観察実験から検討する。
- (2) 会話者間の関係性を事前に知っているかどうかによって、第三者の対人コミュニケーション認知にどのような影響があるかについて観察実験から検討する。
- (3) 第三者介入が対人コミュニケーションにどのような影響を与えるかについて会話実験から検討する。

3. 研究の方法

観察実験と会話実験を体系的に実施した。

- (1) 友人関係にある2人が会話する複数の場面(計8会話場面)を観察するごとに、実験参加者161名がコミュニケーションの良好性、会話者間の親密性、会話者間の関係カテゴリーについて判断を行った。実験参加者 大学生161名(男性52名, 女性69名)が実験に参加した。平均年齢は18.44歳(標準偏差0.63)であった。
手続き 実験参加者は、スクリーンに呈示された動画刺激を見て、コミュニケーションの良好性、親密性、関係カテゴリーを判断した。また、課題への興味や集中度もたずねた。
判断課題 (1)「コミュニケーションの良好性」判断課題 木村・大坊(2007)の課題を用いた。友人関係の女性2名が会話している音声映像から、本人がコミュニケーションをどのように認知しているか(好意的に会話ができた, など3項目, 8件法)を実験参加者に判断するように求めた。
(2)「親密性」判断課題 (1)の刺激から、人物間の親密性(さんとの関係は温かいものである, など3項目, 7件法)を判断する

よう求めた。(3)「関係カテゴリー」判断課題 A (1)の人物間の関係が、初対面・友人・姉妹・親子のどれかを選択するよう求めた。判断課題 B 上出ら(2008)のSKIPINを用いた。SKIPINは血縁関係(姉妹、親子)、友人関係、恋人・夫婦関係、未知関係、上下関係の2名が会話している動画24シーンから構成されており、20秒程度の刺激を見るごとに登場人物の関係カテゴリー(初対面、親子・兄弟、友人、恋人・夫婦)を判断する。

判断精度 (1)「コミュニケーションの良好性」判断精度 会話している本人と、実験参加者の回答の差分の絶対値を算出して指標とした(得点が小さいほど、判断精度が高いことを示す)。(2)「親密性」判断精度 (1)と同様に指標を求めた。(3)「関係カテゴリー」判断精度 A 正解/不正解を指標にした。判断精度 B 全24問の正答率を算出した。

- (2) 対人コミュニケーションを行う当事者の関係性に関する事前情報の有無(会話は友人である=ラベル有条件、ラベル無条件)によって第三者の認知(コミュニケーションの良好性、会話者間の親密性)に影響がみられるかを調べた。ラベル有条件は31名(男性14名、女性17名)、ラベル無条件は43名(男性12名、女性31名)が実験に参加した。2者間会話場面を刺激として呈示して、実験参加者は会話者がコミュニケーションをどの程度ポジティブに認知するのかと、会話者間の親密さの程度を評定した。
- (3) 未知関係の2者で会話する「統制群」と、未知関係2者の会話に1方の友人が介入する「実験群」を設けて、親密話題(キャンパス・ライフについて自由に会話する)と討論話題(社会的テーマについて議論して結論を出す)について会話するよう求め、それぞれの会話を行うごとに、自己呈示動機(個人的親しみやすさ、外見の魅力、有能さ、社会的望ましさ)・対人コミュニケーション認知・感情状態(ポジティブ感情、ネガティブ感情、リラックスの程度)・会話内容の記憶に関する質問項目に回答してもらった。

4. 研究成果

- (1) 第三者(実験参加者)は対人コミュニケーションを観察して、その良好性の判断に基づき、会話者間の親密性を推測していた。これは、行動観察に基づく特性推論を拡張した、対人コミュニケーションの観察に基づく対人関係特性推論と言える。また、対人コミュニケーションや親密性に関する判断と、関係カテゴリー判断には関連がみられなかった。この結果は、社会的判断のピースミール処理とカテゴリー処理に対応している可能性がある。

- (2) 全体的な結果として、ラベル無条件(会話者間の関係性が事前にわかっていない場合)よりラベル有条件(会話は友人関係にあると事前にわかっている場合)のほうが、第三者(実験参加者)は対人コミュニケーションをネガティブに認知して、会話者間の親密性を低く推測していた。この結果は、友人同士の会話だと認識しながら会話を観察すると、第三者は割引原理を適用する傾向があることを示唆している。

- (3) 親密話題・討論話題ともに「統制群」に比べて「実験群」はリラックスの程度が低下していた。親密話題において、「統制群」に比べて「実験群」はコミュニケーションをポジティブに認知する程度が低下した。また討論話題で、「統制群」に比べて「実験群」は親しみやすさの自己呈示動機が低くなっていた。これらの知見は、第三者介入が当事者のコミュニケーションを阻害する危険性を示唆している。今後は、当事者の対人コミュニケーション支援につながる第三者介入の方法を更に検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

木村昌紀・大坊郁夫・余語真夫 「社会的スキルとしての対人コミュニケーション認知メカニズムの検討」 社会心理学研究 査読有 26巻 2010年 pp.13-24.

木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫 「関係性に対する展望が対人コミュニケーションに及ぼす影響 - 関係継続の予期と関係継続の意思の観点から - 」 実験社会心理学研究 査読有 51巻 2012年 pp.69-78.

〔学会発表〕(計 11 件)

木村昌紀・毛 新華 「中国人の対人コミュニケーションに関する基礎的研究 - 未知関係の女性大学生を対象にして - 」 日本社会心理学会第51回大会 2010年9月18日 広島大学

鄭 成溶・木村昌紀・三浦麻子 「同席者が会話行動に及ぼす影響」 日本社会心理学会第51回大会 2010年9月18日 広島大学

木村昌紀・毛 新華 「中国人の対人コミュニケーションに関する基礎的研究 - 友人関係の女性大学生を対象にした会話実験による検討 - 」 関西心理学会第122回大会 2010年11月7日 兵庫医療大学

Masanori Kimura & Xinhua Mao
Interpersonal communication of Chinese people across situations:
The study focused on dyadic interaction by female strangers.

Society for Personality and Social Psychology 12th annual meeting
2011年1月27日 Texas, USA

Masanori Kimura
Intimacy inference based on observation of interpersonal communication.

European Congress of Psychology of 12th annual meeting
2011年7月5日 Istanbul, Turkey

Masanori Kimura & Xinhua Mao
How do Chinese people communicate with their friends?: An experimental study focused on dyadic interaction by female friends.

The 9th biennial conference of Asian Association of Social Psychology
2011年8月30日 Kunming, China

木村昌紀・毛 新華 「対人コミュニケーションの日本・中国間比較研究 - 両国の円滑な異文化交流に向けて - 」 日本グループ・ダイナミックス学会第58回大会 2011年8月24日 昭和女子大学

毛 新華・木村昌紀 「社会的スキル・トレーニング(SST)プログラムの文化的効果性に関する検討 - 中国文化要素が配慮されたプログラムを日本人大学生に実施した結果から - 」 日本グループ・ダイナミックス学会第58回大会 2011年8月24日 昭和女子大学

木村昌紀・毛 新華 「友人関係の対人コミュニケーションに関する日本・中国間比較研究」日本感情心理学会第19回・日本パーソナリティ心理学会第20回合同学会 2011年9月3日 京都光華女子大学

毛 新華・木村昌紀 「中国文化要素が配慮されたSSTプログラムの日本人大学生への効果 - 自己・他者評定による行動レベルの検討 - 」 日本感情心理学会第19回・日本パーソナ

リティ心理学会第20回合同学会 2011年9月4日 京都光華女子大学

木村昌紀 「“人とのつながりを読むこと”の構造 - 対人コミュニケーションの観察に基づく対人関係特性の推論 - 」 日本社会心理学会第52回大会 2011年9月19日 名古屋大学

〔図書〕(計 2 件)

木村昌紀 誠信書房 「第4章 人間関係のコミュニケーション」(「人間関係の心理パースペクティブ」藤森立男・編著) 2010年 pp.55-70.

木村昌紀 ナカニシヤ出版 「第8章 協調するコミュニケーション」(「幸福を目指す対人社会心理学 - 対人コミュニケーションと対人関係の科学 - 」大坊郁夫・編著) 2012年 pp.170-187.

6. 研究組織

(1)研究代表者

木村昌紀 (Kimura Masanori)
神戸学院大学・人文学部・講師
研究者番号： 30467500